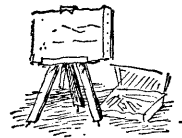


## 私の保育

——自らをみがくこと——



良知 三恵子

いわゆる自由保育形態という保育に取り組んでから一年。

“悪戦苦闘”という言葉にふさわしい毎日でした。苦しくなって投げ出したいと思った日も何度かありました。しかし、いきいきとした子どもたちの笑顔に勇気づけられ、現職研究会の先生方に助けられ、やっとここまでたどりついた、というのが本音です。私の保育——悪戦苦闘の保育ということになるのでしょうか……。自分の中ではいっぱい尽くしてきたつもりでも、その足りなさを思うと顔が赤くなります。

私が初めて現職研究会に参加させていただいた年に、堀合文字先生から、「保育はすべて保育者の常識にかかっている」という言葉を、何度となく耳にしました。その頃から子ども

と生活を共にする自分というものが、とても気になりました。毎日の保育の中で、自分の感じ方・考え方が子どもに大きく影響することを知ったとき、自分自身の役割の重大さをつくづく感じます。私の中の“常識”というノートには、空白の部分がたくさんあります。今までつちかわれてきた私の常識とは何だったのでしょう。それは、うわべだけのものであったような気がします。自分の常識の不充実に気がつきます。倉橋惣三先生の『育ての心』の中に、「先ず内へ向かった教育なくして、外へ向かった教育はあり得ないことである」とありますが、本当にそうだと思います。保育者として子どもたちを見つめる目を養っていくと同時に、

一人の人間としての自分をみがいて、空白の部分に少しずつ加えていけたら、と思っています。

私は去年、ある出来事に出会いました。それは、とても悲しい経験ではありませんでしたが、私にいくつかのことを気づかせてくれました。そして、私の常識のページを綴ってくれたのです。

## ◎うさぎの死

四月のある晴れた日、私は歌でよく知られている横浜の伊勢佐木町へ買い物に出かけました。買い物ですませて通りをブラブラ歩いていくと、にぎやかな子ども声に囲まれている露店が目にとまりました。何だろう？と思って近くに行ってみると、そこには掌<sup>てのひら</sup>ほどの、それはかわいらしいうさぎたちが、慣れない足どりでビョコビョコ動いているではありませんか！

私はしばらくのあいだ、その愛らしいうさぎたちの姿にみとれていました。見ているうちに、その中の一びぎの黒いう

さぎに目がとまりました。つやのある黒い毛がふさふさとしていて、鼻のあたりと首の横のところがちよっぴり白くなっていて、あまり動かないうさぎでしたが、その黒い瞳はきらきらと輝いていました。私は、もうその黒いうさぎをあとにして帰ることができなくなってしまいました。そして、その黒いうさぎともう一びぎ、友だちの白いうさぎを買いました。二匹が仲良く寄りそう姿は、ガス・ウィリアムズの『白いうさぎと黒いうさぎ』そのもので、まるで絵本の中からぬけ出してきたかのようでした。

小さな箱に入れられたうさぎをかかえて家に帰ると、父と母が「ああ、またか！」というような顔つきで、けれどもニコニコして、私と二匹のうさぎを迎えてくれました。（我が家に事件をまきおすのは、いつも私でしたから……）

母は、倉庫からうさぎの家にあふわしいダンボールを持ってきてくれました。父は、仕事の帰りにうさぎの大好物のトンボポをどっさり摘んできては、うさぎが食べる様子を目を細めて見えています。又、母は買い物たびに、葉のついたにんじんがあったからと言って、何本ものにんじんを買いこんでは小さなうさぎにやわらかい葉をあげました。まだ子どもなので、かたいものはあまり食べません。そんな日の夕食に

は必ず、にんじんが何らかの形で食卓に登場しました。それでも食べきれないで、近所の家にくばったりもしたのです。

この二匹のうさぎのおかげで、生活の忙しさにおわれて話す機会が少なくなりがちだった我が家に、対話をとりもどすことができました。

やがて、黒いうさぎには「ハリー」、白いうさぎには「ミミ」という名まえがつけられました。ハリーとミミはとてもいたずらになって、夜中に箱からとび出して大騒ぎをしたりしました。そして、リンゴでもにんじんでもキューウリでも、ガリガリかじってたいらげてしまうようになりました。

又、名まえを呼ぶと耳をぴんと立てて、声のする方に歩いてくるようにもなりました。生き物を飼うという経験があまりなかった私にとって、ハリーとミミとの生活は、とても新鮮でした。園の子どもたちにも、毎日のように話して聞かせました。子どもたちはとても興味深げにうさぎの様子に耳をかたむけ、何度か話をするうちに、クラスで世話をしてみようということになりました。

五月八日、もも組に二匹のうさぎが仲間入りです。子どもたちは大喜びで、大事に世話をはじめました。例えば、毎日うさぎの好きな食べものを持ってきてくれたり、寝る時に寒

いといけないと言ってスポンジをもってきてくれたりして、二匹のうさぎをクラスの一員として大切にしてくれました。

五月十三日、この日は、園の行事の母親対象の講演会の日でした。講演会のあいだ、園児は近くにある公園へ散歩に出かけます。私の園では、園庭がコンクリートと人工芝ですので、できるだけ機会をとらえて園外に子どもたちをつれ出すように心がけています。この日も、子どもたちは自然に囲まれた公園で思う存分とびまわり、みんなどろんこになるほどでした。園に戻って帰りの支度をすませると、すぐに降園の時間になりました。子どもたちを母親のもとに返して、ホッとひと息ついた時、隣のクラスの先生が私の部屋にあわててかけこんできたのです。

「先生、知ってる？ うさぎが大変なの！ 白いうさぎが……、それを聞いてすぐにうさぎのところへかけつけるとどうでしょう！ ミミが四本の足を力なく投げ出して、ダンボールの中で横たわっているではありませんか。その鼻からは血がにじみ、口からはあわをふいています。呼吸は不規則で、今にも死にそうでした。何でも講演会に一緒にきていた

未入園の子どもが、白いうさぎを高いところから投げたらしいというのです。

私は蒼くなつて、すぐに犬猫病院にかけつけました。病院のソファアにすわり、祈るような気持ちで、ミミがはいっているダンボールをひざにしっかりとかがえていました。今にも泣きだしそうになる自分をおさえるのが精一杯でした。他の順番を待つ、犬や猫の飼い主の方々のあたたかい好意で、ミミは一番先に診察してもらうことができました。診察の結果、ろっ骨が何本かおれていて、どうやらそれが内臓にささっているらしいのです。鼻からの出血はそれが原因だということでした。先生はミミの体に注射をしたあと、ゆっくりとやさしく私に言いました。「今夜一晩が山でしょう。大切に上げてください。」

私ははいねいに診察してくださった先生と順番をゆずってくださった飼い主の方たちにお礼を言いました。その時、私の目に見えるものすべてがにじんでいました。でも私は、涙をこぼしたくありませんでした。ミミが死ぬということを確認したくなかったから……。

幼稚園に帰ると、講演会の講師の先生を囲んでの昼食会が催されていました。私はひっそりとした職員室にはいり、ミ

ミをやわらかいタオルの上にとっとなねかせて、しばらくのあいだボーッとしていました。そしてその会合に参加するため、冷静になろうと自分に言いきかせ、昼食会の仲間入りをしました。遅刻したことを詫びると、園の先生が「うさぎ、どうだったの？」と聞いて、ミミのことを心配してくださったので、犬猫病院の先生に言われたことを話しはじめた時、今までおさえていた涙があとからあとからあふれてきて、私はその場で泣きだしてしまつたのです。

泣きながら、講師の先生にとても失礼になると思い、こみあげてくる気持ちを必死におさえようとしたのですが、どうしてもだめでした。とうとう私は顔をあげることができなくなつてしまいました。そんな私に講師の先生が、かつてご自分が飼っていらした猫のお話をしてくださったのです。「動物でも、一緒に生活していると、家族の一員になってしまうのですね」と、猫の思い出とともにやさしく語ってくださいました。私はその時、大きくてあたたかい毛布につつまれたような気がしました。そして、私の中にこみあげてくる悲しみを、少しずつやわらげることができました。その時の先生のやさしいお心使いに心から感謝しています。

その日、私は白いうさぎミミを、そつと家に連れ帰りまし

た。リンゴやにんじんをすって食べさせると、少し元気になり、三歩、四歩、あるけるようになりました。ミミは精一杯生きようとしているように受けとめられました。その後、母と私とで手を尽くしましたが、六日後にとうとう息をひきとってしまいました。しかしミミは、その小さな体で、命ある限りを懸命に生きぬいてくれたのです。

私は、うさぎとの生活を通じて、動物への愛というものを私の中に感じることができました。これほど、私の中に強く大きく存在した動物はありませんでした。今までにも私は、バッタやカマキリ、ヒヨコなど、いくつもの死に出会いました。そして、動物の死の処置はどうしたらいいのかなど、保育者の常識としての対処はしてきたつもりでした。例えばお墓を作ったり、お祈りをしたり……。けれども、私の中に本当にそれらの動物たちへの愛情があったのでしょうか？ 又、愛情をもとうと、いっばいに努力したでしょうか。今思い返してみると、その時の自分は、子どもたちと同じような行動をとってはいたけれども、子どもたちの心からはるか遠いところに位置していたに違いないのです。私が私自身

に伝えられないものを、どうして子どもたちに伝えることができるのでしょうか！

白いうさぎミミは、私に大切な体験をさせてくれました。そして、いろいろなことに気づかせてくれたのです。あなたかい人々に囲まれている私のことを、私の動物への愛が今までいかにうすっぺらいものであったかを……。又、生きている、ということの意味を考えさせてくれました。

### ◎私の保育

今、これが私の保育です、と言えるものは何ひとつありません。ただ、しいて言うならば、先生と子どもである前に先ず、人間と人間でありたい、喜びも悲しみも子どもと同じところで分かちあえるような人間でありたい——そうなれるように努力するのが私の保育ではないかと思えます。そして、子どもたちにいつも願うのは、思いやりのある人になってほしいということですが、そのためには、思いやりのある自分の生活を心がけていきたいと思います。

(横浜学園附属元町幼稚園)